

朝、起きると何もかもが変わっていた。

感覚も、感情さえも。

「おはよう」

キースは天使のように綺麗に微笑むと、すっかり声も暖か
れて仕舞い、唄えなくなつたカナリアへ優しく口接ける。
カリーナは大きな手で頬を撫でられると、静かに瞳を閉じ
てその口接けを受け入れた――。

「スカイハイ！…本当に、こんな所で……するの？」

カリーナはビスクドールのような美しい顔を真っ赤に
して、哀願するようにキースを振り返る。

「では、どこでなら良いのかな」

どきどきして、心臓の音が彼にも聞こえてしまいたいようだ。
二人はブルーローズ専用のトランスポーター内に居た。
事件も無事に解決し、ヒーローインタビューも終わってい
る。

誰も来ないとは思うけれど、PDAがいつ鳴るかも分
らないのに――。

「ローズ君、ほら、壁に手を着いて」

言われるままカリーナは手を着き、細腰を差し出す。
衣装のままのカリーナに対して、キースはアンダースーツ
姿だ。

「衣装、汚れちゃう」

抗議を込めて後ろから手を重ねてきた男を振り返ると、
キスをされた。弾力を愉しむように張った乳房を揉まれ舌
を吸われると、気持ち良くて、それだけで身体は熱くなる。
「クリーニングに、いつも出しているんだらう？ 替えも
ある。…と、ローズ君は余裕だな」

言いながらキースは、つまらなさそうに衣装の上から秘
処をそつとなぞる。指でこすると甘やかな声が上がった。

湿り気を帯び、すっかりショーツにあたる部分は淫花に貼り付いている。

キースは低く喉を鳴らした。

「――びしょびしょだ」

緩慢に実核には触れず、縁を行き来するだけの愛撫に知らずの内に腰は悩ましく揺れる。焦らしながら、蜜を垂らし続ける秘裂ヘクイツとシヨーツを実核に掠め当たるよう喰い込ませる。カリーナは大きく喘ぎ、達しそうになる。キースは犬のように荒い呼吸を繰り返す少女に、さも申し訳なきようにするりとふやけてしまった指を抜いた。「これ以上、衣装を汚すとローズ君は困るのだろうか？止めておくよ」

「ア…アア…ッ」

カタカタと瘡おじりのようにカリーナはふるえる。涙の溜まった瞳は艶めかしく潤み、衣装からは乳房がこぼれ太腿はあり得ない位に濡れている。

（なんて顔をするんだ…）

いっそのことこのまま貫けたらと思う、何度か肌を合わせただけなのに引き返せない程のめりこみ、飢餓は募る

一方だ。

アンダースーツがきつく感じる程、自身は形を持ち、いきり勃つて苦しいくらいだが、ずっとこのふしだらなヴィーナスを眺めていたい気もする。

（そうすればもつと乱れてくれるだろうか、それとも耐えられなくなるのは私の方か――）

貫くような鋭い視線にカリーナは腹にむず痒さを覚え、壁へ整えられた爪を縫るように立てるや軽く達して仕舞う。身体は痺れ、少女はガクンと膝を着いた。

ぼたり、とえんか仕切れなかった銀色に光る滴を床へこぼすと、キースは洗練された動作で悠然と目の前に立った。アンダースーツのジッパーを初めて下ろすと、ボクサーパンツから太い牡を取り出した。

（…嘗めたらその涙は、甘いのだろうか）

眼球も甘いのもかもしれない。喰らいたいだけの獣よりもこれでは性質が悪いが衝動は沸き上がる。

キースは息を吐くと、泣き濡れるカリーナの顎を持ち上げ牡を口許まで持つていった。

「ア……？」

「ほら、見てるだけでいいのかい？　びしょびしょのそこへ、これが欲しいのなら舐められるだろう？」

カーリーナに思考する力はほとんど残されていない。おそるおそる脈打つ肉棒を細い指で手袋越しに持った。しばらく指を絡めて奉仕をしていたが、柳眉を寄せると思い切つて口を開けしゃぶる。ぎこちない舌の動きと、いやらしい表情にキースの肉棒は質量を増す。

最高に怒張した牡を少女の唇から抜くと、涎を垂らす口許を丁寧めいめいに指で拭う。

「ちいさな口でよく頑張った、ご褒美をやらなといけな
いね」

いっそ残酷な優しさでキースは告げると、舐めながら達した花びらを荒らすように突つき回す。

「やああ!!　ヒンツ……アアンツ!　もっ……焦らさな……」

「ん？　イッた後にこうやって、いっぱい突かれるのは大好きじゃないか、ここも堅いし」

充血した胸の飾りを潰すように摘む。官能が呼び覚まされるばかりで、カーリーナは腰を揺らした。

「舐めたから、挿入いれるとは言ったつもりはないんだが」
喋る間にも、ぐりぐりと花びらを掻き回されカーリーナの子宮はマグマのような熱を産む。

(も……お、奥までぐちゃぐちゃに、突いてほし……)
おかしくなりそうだ。

「スカイハイ、ねえ、意地悪……しないで」

初めてのおねだりは、どちらが蛇の生殺しなのか判らない程に、可愛らしい。

一気に形成は逆転し、キースから一切の余裕が消えた。
寧ろ精一杯、焦らしていたのだ、今度は本能のままに男は動いた。

「んんっ……!!　ふあ、あつ、んあー!」

「……ツク!」

もう何も考えられない、気持ち良くてどうにかなりそうだ。繋がりが合わさったそこはとろけそうだ。ずぶぬぶと、粘着な高い水音がトランスポーターにあふれるが、二人はお互いを激しく貪り続けた――。